

32

78

78

754

天満宮御傳記畧序

世の高き卑し或老し若き男女を以て天満宮の神徳を
仰ぎてその心ざらば無く手習ひつゝの事そを教ふる人々
御神乃御恵茂世承らばふとなく誰もそ世に心置かず
心知くむとくまき世に傳へ傳へるは古説おほく掛
卷るも畏おの神の御上をこらぐ心置引くお儒者の漢
意をもとて經い佛者を御意りて所會したる種々
孰も傳へて正室乃七日を撰能記きつふ書目のふ夷も
甚も效はくこと事形の空あ子我か気吹能屋大人
いと美加重のし程々の世御神の御神徳をその女神
世の古き説明らむと新しき目とあそむ御意

11224

字の端からして今天の下にその名を神のさし動か
た世道の學びより倫の心を大人とすのも成す
種々珍々もよき事ともも著るべきことなるが。世御神の
事をもつて更にも心めぬこと。百もあらん藉の中より
そは御事の見ええは限を越えし振く終き終
まざる終くを辨字捨て。おはれ西實の方をま曲り
況明々々。天満宮御傳記と號られまをま。倍み
おろくおろ御傳記の甚異りよしく。眼覚し
御書方のまよ。然まきごと。いと細よ出れぬる記
乃。二百葉ばかり有るをみお尋らば。空の高く
統得なるも非ざら。板子彫る事も空の高く。統
た。

己の免ちて。今度その中の大畧を抄録して傳言
をとり取交る。目録くものし。高橋正雄と
お計りして。末く根本と形。御神の恩頼
を。報ひ奉る。種むと純。既為ある。更にも言んば。
手羽ふふ等。又。西實は御傳を。知く。し。めむ
を。能。眞。心。め。た。の。ま。を。

文政三年 辰年 五月二十五日

根岸延貞謹記

天

天満宮御肖像



蕙齋 紹真筆 眞

天満宮御傳記畧

上之卷目錄

○天満宮御先祖の事付う野見宿祢當麻蹶速相撲の事
並に御父祖の事

○天満宮御生立の事付う都朝臣の許して御弓遊を事
並に御昇進の事

○激海國に使ふ應接の事付う羅城門の鬼神良香朝
臣の詩を継ぐる事並に菅公讚岐守に任て雨を祈る事

○菅公諫めて遣唐使を停める事付う五十歳の御賀の事
並に醍醐天皇御即位の事

○菅公手向山あそ御歌の事付う五位路鴨の事並に紫野

宣嘩せんわ孔事

○管公かんこう關白くわんぱく職御しやくご辞退じたいの事こと付つり三善さんぜん清行せいぎゆ朝臣あそ異見いけんの事

○管公かんこう讓言じやうげん言ことふりて左遷させんせりて事こと付つり飛梅とびうめの事

下之卷目録

○管公かんこう筑紫つくしめく御詩歌ごしげ孔事こうじ付つり天満てんまん天神てんじんと成ならせり

ゆる事

○天神てんじん孔御こうご崇あそふりて藤原ふじわらの時平ときへい公こう薨こうずりて事こと付つり右

大辨おほひん公忠こうちゆう卿頓けいとん死し蕪生うせいの事

○天神てんじん法性ほふしやう房ぼうの許ゆる降くだらせり事こと付つり清涼せいりやう殿でん大雷おほらいの事

○金峯きんぷ山さんの日藏ひざう行者ぎやう者頓しやとん死しりて天神てんじん孔御こうご住所じよじゆを見みて蕪生うせいの事こと付つり北野きたの社造じぞう立たれ事

○内裡うち度たく炎燒えんしやう孔事こうじ付つり太宰府たさいふ天満宮てんまんぐうへ勅使ちやくしを立たられ

御贈官ごぞうくわんの事

○北野きたの社じや茂も二十二にじふに社じや小加せうかへり事こと付つり天満宮てんまんぐう孔御こうご神靈かみたまを

祭まつり座ざ置おき事

目録終

目録

○天満宮御先祖の事付より野見宿禰當麻蹶速相撲乃事並小

天満宮御傳記畧上巻

○天満宮御先祖の事付より野見宿禰當麻蹶速相撲乃事並小

天満宮御父祖より此事

天満大自在天神宮の御先祖代尋ね奉まを天照大御神第二乃

御子天穗日命此御子天夷鳥命神代天降りて出雲國系住

天皇の御世出雲國造に任りて國造より今世の國守

にありと此宇迦都久怒命の子野見宿禰命よりあり勇猛

ありて力量人より越り爰ふ十一代垂仁天皇の御代小大和國葛

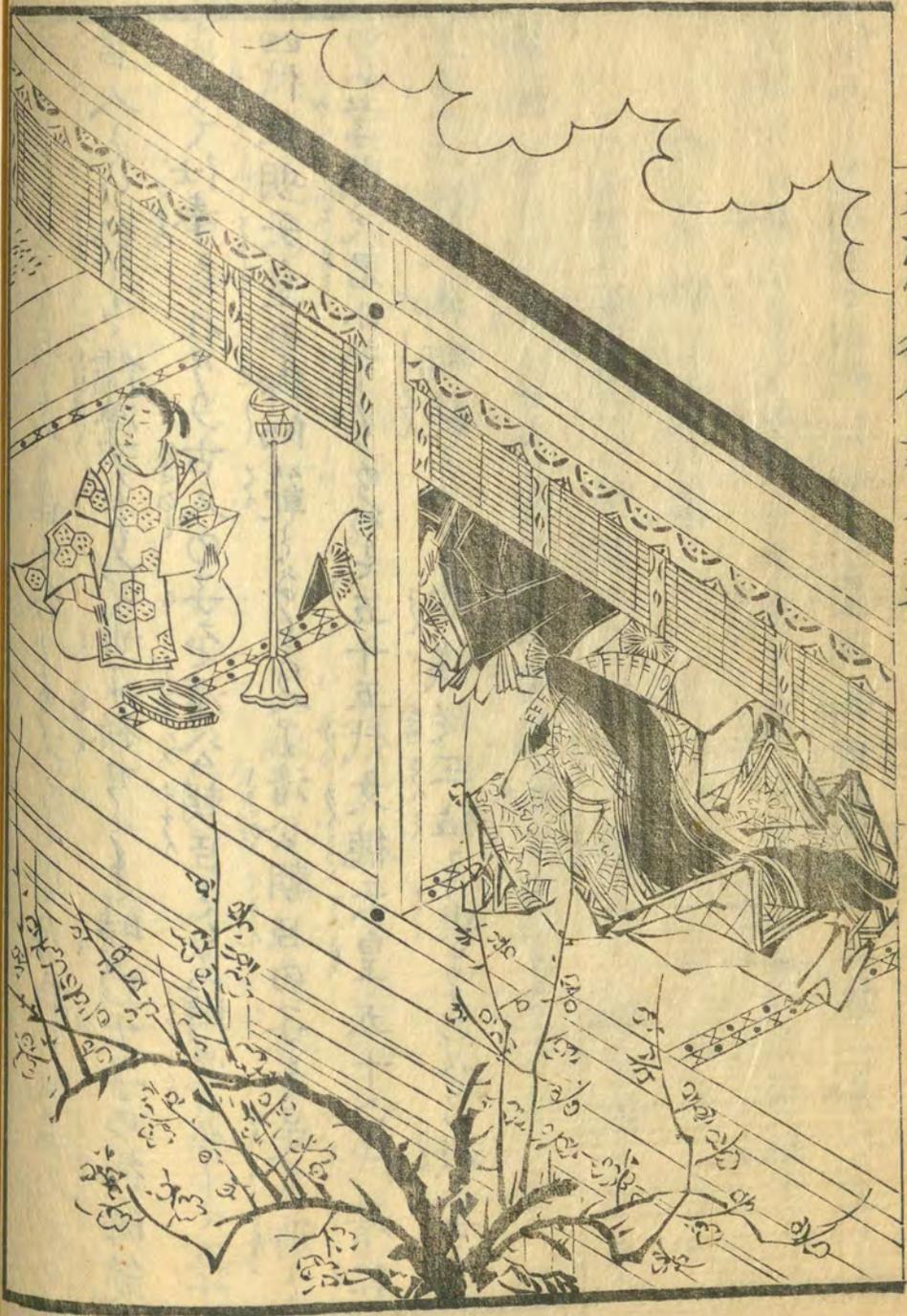
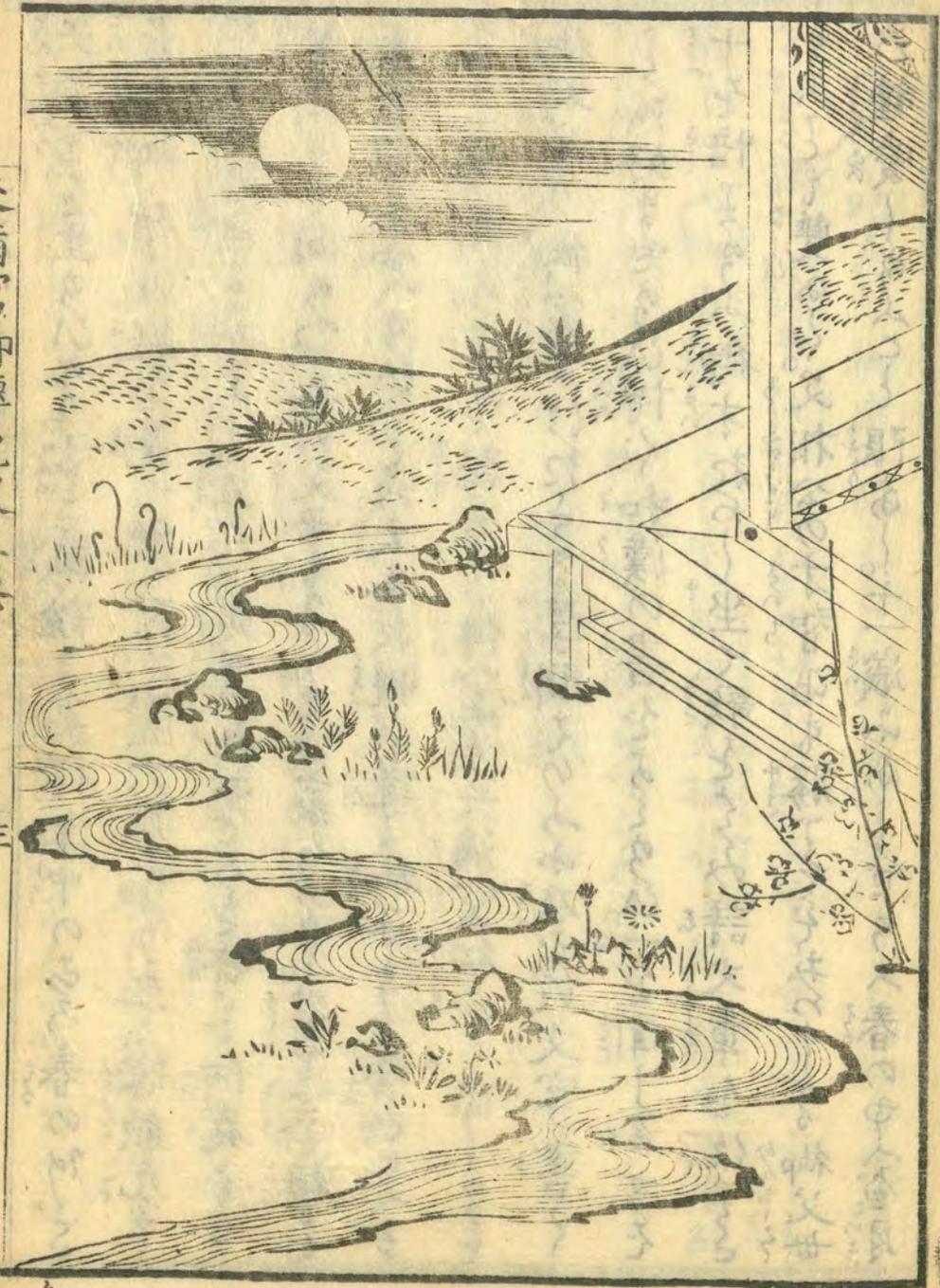
下郡當麻邑より地より蹶速より者あり力強く牛角をも扱

むよりて人を蹶るより速より故小蹶速より名乗る此

人

その力の強き小ほりて人を侮り天子の命をも用へて常より人
ふ誘りて四方の國を治るるも我が力及ぶ者も有らざるを罰せらる
天皇よの事然きまゝ召て憎と思はれ野見宿祢を出雲國
より召りて角力とせり。ふ兩人立對ひ互に足を擧て
蹴合はるに野見宿祢乃力勝りて當麻蹶速が腰骨を踏をり
すこ其腰をも踏折さる。天皇御歡あり。蹶速が領分を
悉く野見宿祢に賜ひきり。こき角力の始あり。因幡國高草郡
に大野見宿祢命神社として式内の社あり。此宿祢の社あり
角力人はいふ及ぶ力を好む人の信心まじき社あり。はて野
見宿祢は後小大和國の菅原邑とつゝは秘王住り。この故に
四十九代光仁天皇乃御代は野見宿祢より十五世の孫古人といふ

人は菅原氏を称しき由を勅しり。これ菅原氏の始あり。この
古人といひは儒學をりて世に稱せし時乃天子の御師範
として仕奉られり。古人の子を清公朝臣とりの博學ありて五十
四代仁明天皇の御師範とりのり。清公朝臣の子を是善卿と
りの學問父君よかりり。五十五代文德天皇五十六代清和
天皇二代は御師範として參議從三位に進ませり。故に世に
菅相公とぞ申しり。こき天満宮乃御父君あり
○天満宮御生立の事並に都朝臣の許めり。御弓遊をり事
付り御昇進乃事
天満宮の御小名を阿呼とぞ申し奉り。御母は伴氏より
嫁へり。五十四代仁明天皇は御世兼和十二年六月二十五日小



天満宮を生むひたり。古き或説よ嘉祥年中のさる春の何と
是善卿むより庭を見ておえせし。五六歳をうりめて容貌凡そ
の童子忽然よ来ましく立ち。是善卿おどろき奇き何處より
来りると問ひて。吾の父母もあらず。家もたず。君を父と頼と
奉らむと答へむ。いふ。大いに悦び。遂に御子とて養ひぬる
まのとも見えざるを誤る傳へあり。天満宮幼少く侍りまを
御時より。御家よげれたる學問をりぬ及む。文字書く
こと好ませむ。博く和漢の書をよむ。一を聞し。百を
十を悟る。御才おのり坐て。歌をよみ詩文章を作す。こ
ゆみこも雙あく。父相公の才智ぬも勝す。まのり。御父母
乃鍾愛しぬ。いと限あり。十一歳ふあ。せの春の中へ。正月

らうよく晴きて。御庭の梅と。白ひ照り。何の折ふ。父相公御髪
をかき撫つ。詩を作す。むひあむ。と。試よ申させぬ。少くも
案トの御氣色もあきて。月夜見梅花との詩を。五言絶
句よ作して。父相公の御前にて。参らせられり。あ

月耀如晴雪
梅花似照星
庭上玉芳馨
可憐金鏡轉

と遊む。らん。相公見ぬ。ひて。蘭生。どて。芳し。と。信ある。か。お。と
歎。ト。の。ひ。たり。是。ぞ。菅。公。の。詩。を。作。ら。せ。ぬ。始。ち。の。清。和。天。皇
乃。御。世。貞。觀。元。年。十五。歳。よ。ま。の。せ。ぬ。正。月。元。服。ぬ。入。こ。の。時。を
と。御。名。を。道。真。公。と。稱。奉。り。御。字。を。三。と。申。し。き。故。小。世。と
菅。三。と。ぞ。申。し。る。此。夜。よ。御。母。君。は。あ。り。と。悦。び。ぬ。ひ。て。菅。公。を。祝

ある御哥ふ。

久方の月の桂もむるをうり。家の風をも吹くをていづれと詠ト
あへ月の桂を折るといふ。學問の御試よあつて。朝廷へ召出され
たる人ぬ桂木の枝を賜ふ故あり。御先祖より學問の御家あれ
を。家の風といふ詠の入りあるなり。常ふ大内記都良香朝臣
従ひて。遊學といひしが。十九歳にあらせり。羊の正月より此詩へ
至り。あつ折る人あつ集りて。弓試射ることあり。行あひま
ほへ。人々菅公を見参らせり。思ひまは。此君を儒士の家小
生。常ふ万巻の書ふ心を用ひ。人を戸をひ開ぢ。あつてを
出む。學窓は向ひて。誓古の功をこそ積むべけれ。弓射る
こと。曾て習ひ無して。弓乃本末をも知あつ。射させ参ら

せて笑り。やとて。弓は矢をそめて。御前小うみ。春の始。あつて
候へ。とて遊む。候へとぞ申さる。固く辞し。人ども。あつて
請ふ。菅公。とて試よとて。弓場。小で。番の相手。よ立あつ
びて。推さぬ。弓小矢をうへ。引け。引け。ひさ。進退。これ。礼
ふか。あつ。打上げて。引下を。あり。暫く。あつ。固く。あつ。體目も
あや。あつ。見奉。あつ。御姿。乃。勝。ま。あつ。の。あつ。切。て。放。ち
う。あつ。文。色。弦。音。弓。倒。あつ。勢。あつ。て。遅。く。矢。所。一つ。違。へ。と
放。う。あつ。當。あつ。良。香。朝。臣。を。け。あつ。見。る。人。々。み。あつ。思。ひ。の
外。あつ。事。に。驚。き。あつ。良。香。朝。臣。感。ふ。堪。あつ。て。あつ。弓。場。よ
下。あつ。御。手。を。引。き。酒。宴。數。刻。あつ。及。び。て。種。々。の。引。出。物。を。ぞ。矢。多
ら。せ。ら。れ。る。貞。觀。十。二。年。二。十。六。歳。あつ。三月。對。策。及。第。

のい。その日正六位上の位を授けり。元服しあはる時、御母君
 乃詠み入る御哥のごとく。果して桂を賜へり。對策及第との朝
 廷より其人の才学乃ちどく試みらば。其難問は答へたる。文化
 ことわり明白なれば登庸られて。官に進むとあり。是より菅公の
 御名いよく顯りれ。聞えぬ。二十七歳はあはせり。正月は玄蕃頭
 とり。官小任。ずしきあはる。次は御昇進あり。五十七代陽
 成院天皇の元慶元年三十五歳に成らせり。正月は文章
 博士。從五位上。式部少輔と爲り。經上り。此年より人々代
 して作らるる文章。御詩作らば。数ふる暇もなかり。悉く
 菅家文章とり。御集十二卷に記させり。瓜見たり。

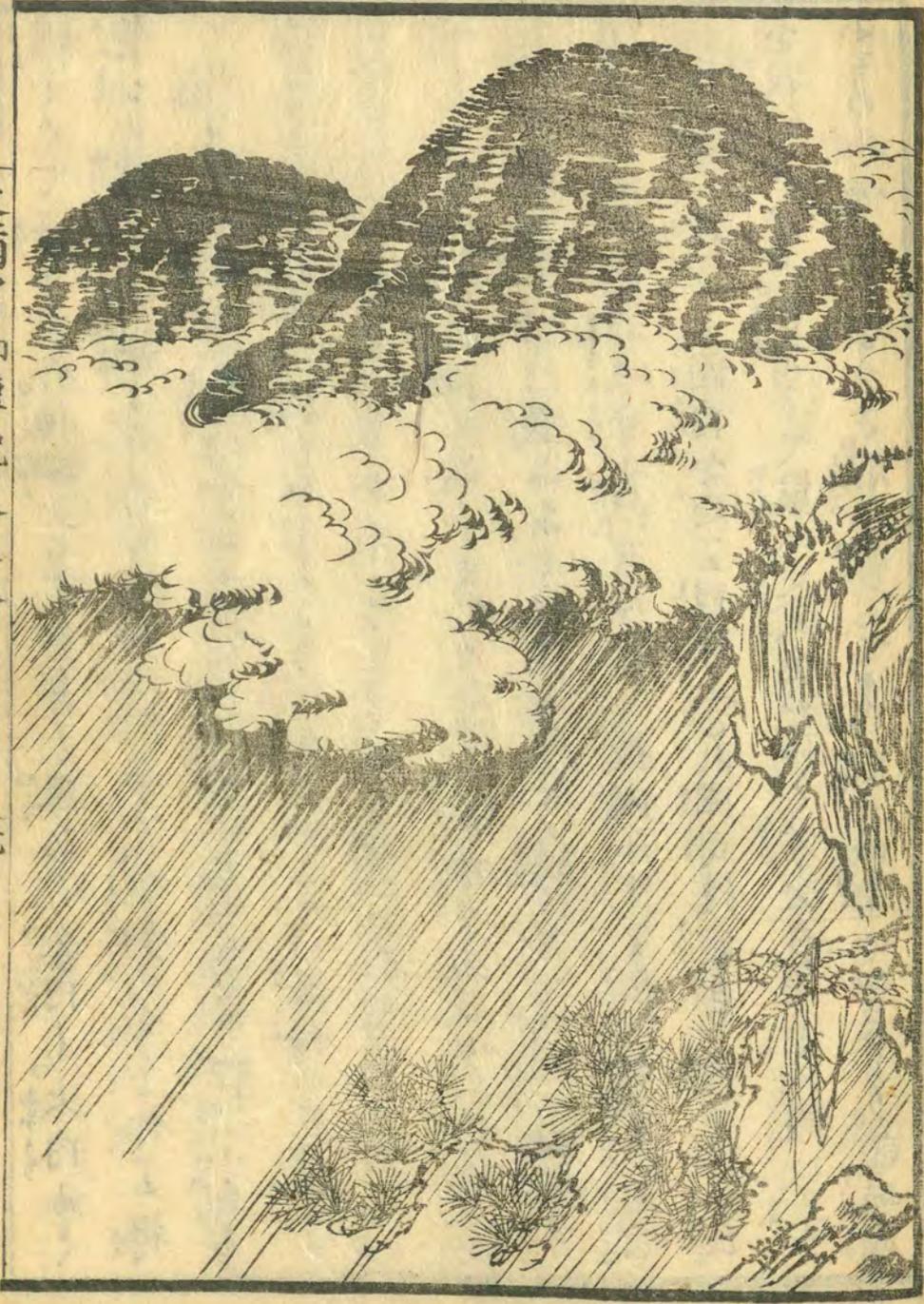
○渤海國の使は應接し。の事。付より羅城門の鬼神。良香朝臣の

詩を継ぐ事。並小菅公讚岐守に任て。雨を祈り。の事

元慶七年に。渤海國乃使裴頴といふ人來朝せり。菅公を權小治部
 大輔とり。官よめて。應接せり。めり。贈答の御詩あり。御集ふ
 見えり。使者菅公の文筆を白樂天に似て。あは勝り。感歎し
 奉り。此より前。都良香朝臣參内。時。羅城門を過ら
 ば。春風あは。糸を乱す。柳家の垣根。見え。見れば
 氣霽風掃。新柳髪
 との句を思ひ得て。次乃句を案。煩ひ。羅城門の上より
 大ま。聲は。

氷消浪洗舊苔鬚

とぞ付らる。良香朝臣身の毛も立て。恐ろ。然る。み



嬉しくして奇きるる如く神助よこそあきしと思ひく参内し。大内めく
 菅公小逢参らむ試よ良香こそ羅城門めく。佳對の句を作し得
 て侍まるとして二句を申つけけり。されば菅公うち笑みせり。ひて。上句ま
 めこそ小御自作の詞とみわえり。下句小みきての鬼神のほだる
 りやと仰られり。良香みとらきて。事の實をあらぐと述らる。
 此よりきて菅公ハ神小通トて入りて。人も申々。五十八代光孝天
 皇乃。仁和二年。四十二歳ふあせり。正月。故有りて式部少輔文章
 博士を罷らむ。讃岐守小任ぢりて。彼國小下り。南條郡滝宮
 邑の官府に住す。國內を巡り視り。これ國司決定する例あり。國民
 を牧ひり。こと寛め。嚴小文武をかゆる治えり。國民大ま
 小その御徳化す。眠ひ参らせり。同き四年の四月。讃岐國

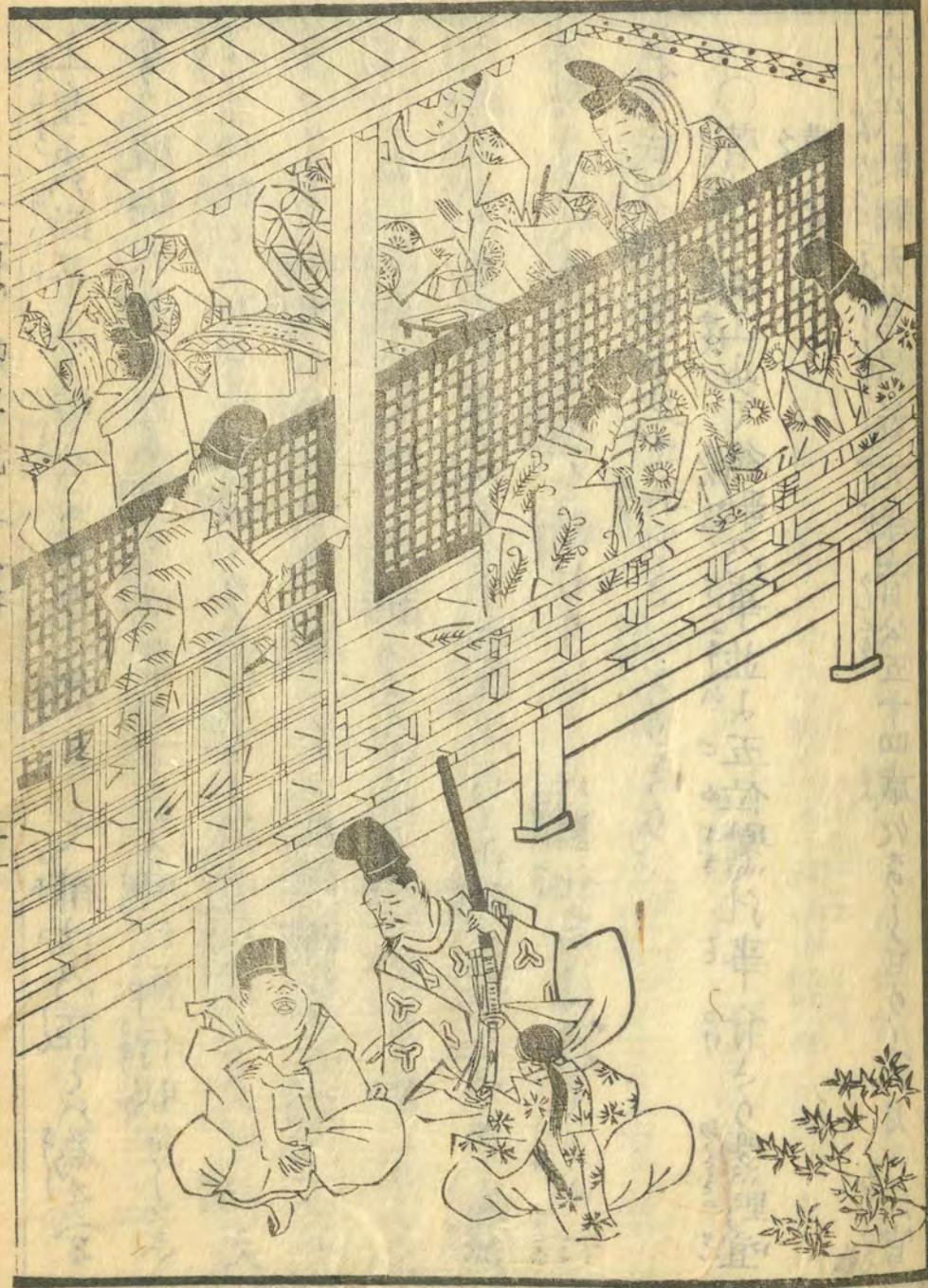
大ま小早し。民ども田を殖付る。苦み。勅。城山神に雨を
 祈らり。爰小菅公。数日潔齋して。祭文を作し。五月六日小
 城山神を祭す。雨を請ふ。其祭文を御集小見えり。丹誠を
 こらして禱す。神その精誠小感。山巔たちまち小雲を
 起し。大雨盆を傾る。降し。國民。万歳をさめて喜ぶ。こ
 限。滝宮に里人。今小至るまで。菅公の徳化を忘き奉らば。辛ごと
 乃七月二十五日小滝宮めく。踏哥をまて。天満宮の祭をあ。こま
 成滝宮踊しり。とて。

○菅公諫めて遣唐使を停めし事。並よ五十歳に御賀乃事。
 付。醍醐天皇御即位の事

五十九代宇多天皇の寛平二年。四十六歳小成らせり。讃岐國を

司免のふらと今歳まで五年あり。この二月。國司の任満より。
 公勅して京都小召する。同き三年。小散位を授け。始めて昇殿を
 聽され。同き五年。四十九歳。あつせり。二月まで。参議左中辨
 まで進する。式部大輔を兼任する。天皇大まき。菅公の文才
 を感と。おろし召て。重く登庸ひらんと。してたり。同た六年。五十歳
 小まう。せり。八月。遣唐大使を命ぜり。此時の官位へ。参
 議勘解由長官。從四位下。兼守左大辨。行式部大輔。春宮亮。ふ
 であつ。副使。文章博士。紀長谷雄。朝臣。命と。然ま
 ども。此時。ろろ。唐昭宗。と。代り。國中。大乱の時
 あり。遣唐使。右らんと。公卿。小評議。り。り。
 とも。遣唐使。り。中世より。始り。國體を。損と。蓋し。ひ。

多く殊。費おく。益。事。り。菅公。奏して。止。
 り。異國。怒。本朝に。仇。臣。九。兵符を。借。
 速。降。袞襟を。休。奉。と。奏。上下。その。文武の
 才を。感。評議。一。是。より。永。遣唐使を。止。又。この
 頃。諸國。乃。下。民。文字。を。書。知。者。少。り。菅
 公表。を。奉。公の。門。を。あ。國。小。遣。て。書。を。讀。文字
 を。書。弘。教。め。これ。國。所。小。文字。乃。師。始。あり。文
 道の。大。祖。も。文字。化。祖。も。申。奉。る。此。故。ゆ。弘。法。大師。と。天神
 と。小。野。道。風。を。文字。の。三。聖。と。申。と。廿。事。要。畧。と。古。書。
 見え。この。寛。平。六年。乃。九月。二十五。日。菅。家。比。御。門。人。吉。祥。院。
 の。小。焦。菅。公。五十。歳。の。御。賀。比。會。り。庭。の。お。り。一人。の



天清宮御言書上卷

十一



天清宮御言書上卷

上皇ゆの政事々々菅公より思召して補佐乃臣と為り
たり。醍醐天皇さゆ小皇太子めて坐する時に御行状々々
上皇の御心よかあるに廢しめんと有るに菅公死をりて諫え
のひりきく御譲を受させり人事とありぬ受禪の日小皇太子
宣つるも汝の位ハ菅氏乃忠諫ゆりてあり我を見るか如く
内外大小の事菅氏ハ決まると宣ふよふに於て菅公ゆ忠誠
残めきんでゆひ皇道を輔けゆひハ聖化も備極く下ハ行
りて民万歳をどめて和らご治まりきり。

○菅公手向山めて御歌の事並は五位鸞此事付り雲野喧
嘩の事。

六十代醍醐天皇昌泰元年菅公五十四歳にあり八月は前官

故の如くゆて民部卿といハ官を兼り此年上皇大和國は御幸のり
菅公供奉のり奈良は幸のりする時手向山小詣り折しも紅
葉錦をあけて面白き景色ありき上皇はふと興せせり
麻を奉らんと有るふ長の御行され某くは手向々々るふ菅公
やぐて御声高く。

此ままびえ麻もとりあふて手向山ゆり此錦神のまゆくと詠ト
めくべ上皇感斜まをぞれりる神まゆふ阿波礼と聞し召せえ

同き二年菅公五十五歳ふり二月は藤原時平を左大臣に
任ト菅公を右大臣任トのり大臣の唐名を丞相といハ故は是より
菅丞相と世ゆの申たり此のち菅公三度表を上り右大臣を辞し
ゆども許しゆりてはて當今御位ハ即るのち逸遊を好ませた

申ひて。神泉苑より鹿くは行幸ありて。民の煩ひも有る事。菅公
諫を奉らんと伺ひぬ。今年尚も神泉苑は行幸ありて。御宴
み長し。せむひるふ白鷺ありて池のみぎわ立止り。天皇御
覽して侍中勅し捕へめ。畏まりて捕へんとす。鷺羽つらひ
て翔らんと。其人すみ。天皇乃綸言なり。飛去こと勿し。りて。
鷺首をふれて命を承る。如し。まねら捕へて献。これ。天皇感
歎し。御まか。鷺羽鳥王と。五位の爵を多ひて放ち。
は。これ五位鷺とり。事の本あり。爰も菅公諫を。鳥すも
綸命を。況や人を。車駕此向ふ。商家を賣買を止め。農
夫へ耕作を。陛下これを思ひ。と申させ。天皇大さ。愧る
ま。是より。幸宴を傳。此。時平公も居られ。かく。

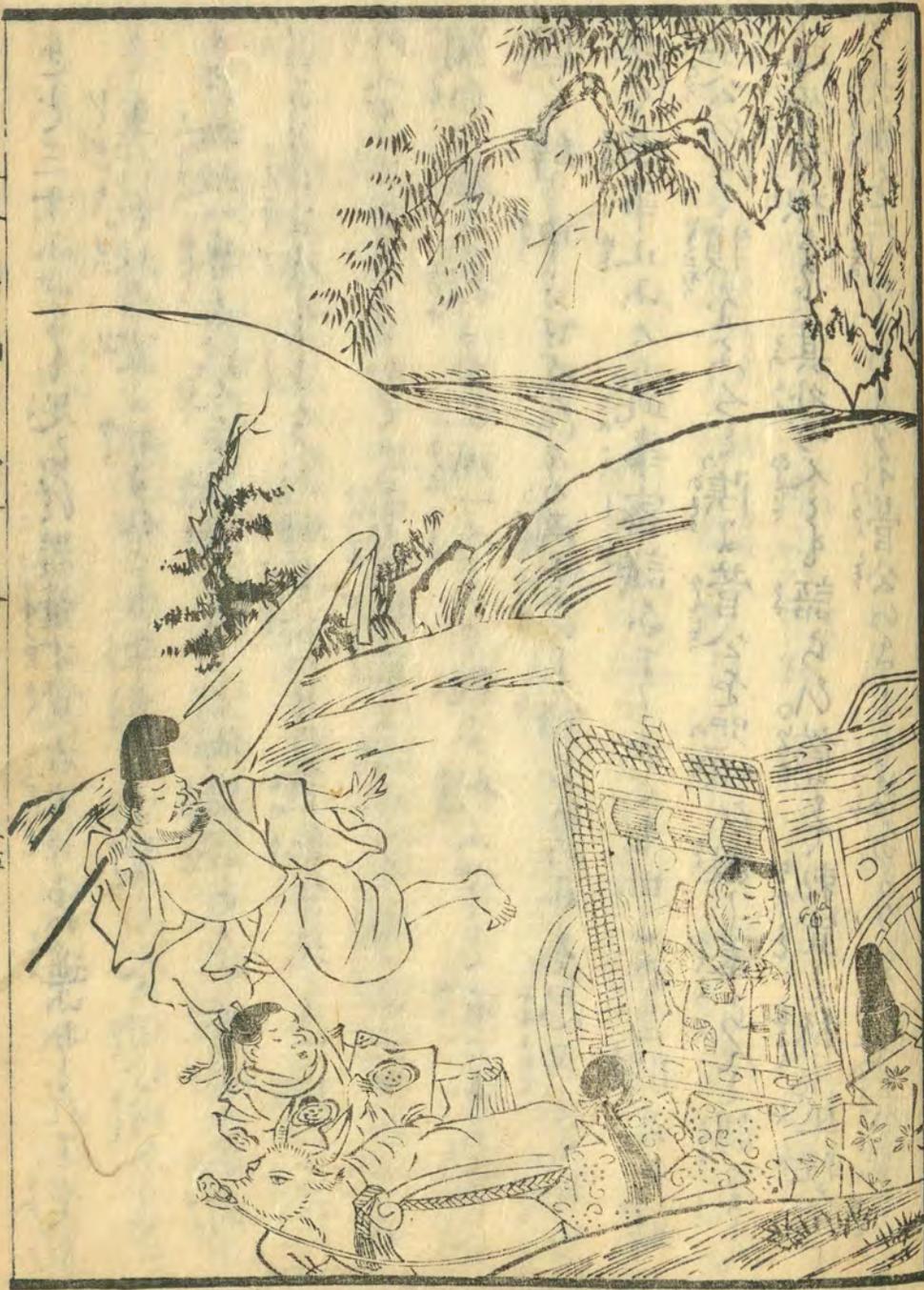
御遊の多く此公乃催あり。菅公の諫を。傍ら。苦。切て居ら
し。菅公。かくの如く補佐し奉。ひ。方民。其
仁徳。浴。時平公。左大臣。一階上。下民服。訟
か。菅公。藤原家の威勢。衰。時平公。心。と
思。然。此。紫野に見る事。貴賤群聚を。當
今の御身。齊世親王と申。菅公の御尊。お。菅公の車。小
乗。出。其。其。時平公も跡。来。日。暴
慢。ある家風。な。其。親王。乗。車。右大臣の御
車。と見て。其。下。立。退。親王。乃。從者。心。中。小
親王。此。御位。三公の上。何。退。返。答。あ。も
及。藤氏。乃。從者。手。を。親王の車。退。故。

雑色ども腹立てつひは争ひとあまら。藤氏の從者ども。理不_ふ足_たず。
 撃てか_く。親王の雑色ども。既_も負_け色_ろ。見えたる処_し。群聚_{ぐん}の中_{ちゆう}。菅
 家_けにやると門人_{もん}どもも。多く居_かし。左右_{さう}の大臣_{だいじん}の從者_{じゆう}ども。喧嘩_{けん}
 あり。聞_きより。足をそ_ろ。小駟_{せう}来_き。親王_{しん}乃_のおこ_し。坐_ま。夢_{ゆめ}にも
 知ら_らず。菅公_{かん}の御車_ごと_らろえ。無_む二_に無_む三_{さん}。藤氏_{とう}の從者_{じゆう}を_ち散_{さん}
 して。左大臣_さ乃_の車_{くるま}を_あ追_お却_かけて_り。親王_{しん}よの右_{みぎ}状_{じやう}を_み。御心_ご苦_{くる}
 く思_{おも}召_めして。御車_ごを下_{くだ}して。左大臣_さよ謝_{あや}。藤氏_{とう}の從者_{じゆう}も
 菅家_{かん}乃_の門生_{もん}どもも。仰_{おほ}天_{てん}して。解_とゆる。左大臣_さの口_{くち}惜_をく思_{おも}れ
 して。其_{その}日_ひを_あ答_{こた}謝_せして。還_{かへ}ら_まふ。菅公_{かん}の車_{くるま}。借_か参_まら_ます。
 より事_{こと}起_あり。暫_{しばらく}く畏_{おそ}る。此事_{このこと}も。時_{とき}平公_{へい}の日_ひ。
 横_{よこ}行_ゆる。ゆゑ。世_よ人_{ひと}も。風_{ふう}聞_き。又_{また}。御_ご伯_{はく}父_ふ。國_{くに}經_{けい}

大納言_{だいなごん}と_ら八十_{はち}歳_{さい}を_りある。二十_{にじゅう}歳_{さい}を_りの美_み麗_{れい}ゆ_へ。也_い。
 北方_{きたう}を_も持_もて。時_{とき}平公_{へい}の身_みと_らて。奪_うひ_とり。その北_{きた}
 方_{かた}と_ら為_なられ。兵_{へい}衛_{ゑい}佐_さ貞_{てい}文_{ぶん}と_らい。人_{ひと}の妻_{めかけ}を_も妨_まげ_らま_す。大_お大_{だい}
 き。人_{ひと}望_{のぞ}を_し失_しひ。日_ひを_あ追_おて。権_{けん}威_いを_りて。損_{そん}る。世_よ人_{ひと}い_まく。菅家_{かん}を_もえ
 せ。益_{えき}と_ら猜_{さい}と_ら憤_{ふん}ら_まり。と_らぞ。

○菅公_{かん}関_{かん}白_{はく}職_{しやく}を_り御_ご辞_じ退_{たい}れ_し事_{こと}。付_つり。三_{さん}善_{ぜん}清_{せい}行_{ぎやう}朝_{てい}臣_{しん}異_い見_{けん}の事_{こと}

昌_ま泰_{たい}三年_{さん}。菅公_{かん}五_ご十六_{じゅう}歳_{さい}。正_{せい}月_{げつ}三_{さん}日_{にち}。天_{てん}皇_{こう}朱雀_{しゅく}院_{いん}は_ら
 中_{なかつ}を。守_{まも}り。上_{かみ}皇_{こう}の御_ご許_{もと}へ_り行_ゆ幸_{きやう}あり。左_さ右_うの大臣_{だいじん}と_らも。小_{せう}供_く奉_{ほう}せ_らる。
 奥_{おく}の御_ご座_ざゆ_へ。上_{かみ}皇_{こう}と_ら天_{てん}皇_{こう}と_ら御_ご額_{ひやく}を_あ合_あせて。御_ご密_{みつ}談_{だん}あり。左_さ右_うの大臣_{だいじん}
 と_らも。天_{てん}下_かの政_{せい}事_じを_も為_なす。前_{まへ}小_{せう}勅_{とく}と_ら右_{みぎ}を_も止_とま_す。
 べ_し。叡_{えい}慮_{りょ}を_もめ_らし_める。左_さ大臣_{だいじん}を_り重_{ちゆう}代_{だい}執_{しやく}政_{せい}高_{かう}貴_きの人_{ひと}



まど三十ふぐも足らば器量才覚右大臣の遙かかれ右大臣
も重代執政乃家よ非ざれども年高く才賢く人の望む所ありこ
まへ執政の専ら此人を任用さへし御密談ありて菅公を御前不
召さる菅公座を立ちし時平公のその気色を見とりて座を立て
外へぞ出らしまざる。かくて菅公御前より出りて密く天下の政事
關白の職を授けし汝一人しと執王行ふべしと有る多きを菅公
固く辞し申させりひる。兩皇いと惜きりのめを思召ども御力
あく其事止みたり。此事密議ありしども世よの事聞えんと時
平公のしく憤をふく。陰に菅公を呪咀し殺し奉らんと謀りし
藤原管根など其外の人とも語らひ偽りて勅宣と稱し巫祝を
て其術を行ひめりる。菅公のさうりも恙ありし。此上の讒言を

りて傾くと。さく思ひ慮られり。菅公の時平公の猜み憎みのる
事を疾く覺りて遂に災ひしこと成思召し。三度まで
表を上りて高官を辞し奏さる。とも天皇聽さる。朕が
卿を見るとき父均し。然る不謙遜をりて官を辞さる。公を
捨て私を愛するは似たり。と宜ふみぞ。菅公涙を垂りて君恩の報
とぞを謝し白して。かゝる上も臣が軀を尽して。詔は従ひのみ
ありと白し。此ほど三善清行朝臣とり博士あり。年ごろ
菅公の御徳を蒙りし人あり。菅公右大臣とて。姦佞の臣と
竝びて。幼主小事奉りて。遂に難逢の事。察して。来
年ハ辛酉此歳めく。大臣難小遇ふべき年あり。と。託して。状
成進上。高官を退き。と諫えられ。菅公は。三度表を

上りて辞しりる。天皇の聽しりて、勅命を清行朝臣の語りて、感して天時も人乃和まらざる。とぞ申さる。菅公を勅命の嚴重なるを慎み、後の難成思ひのぞ。清行朝臣の諫をも顧みり、遂に其言の如くありて悲しけり。

○菅公讒言よりて左遷せしむる事。付ら飛梅此事。

延喜元年菅公五十七歳よりて正月七日、從二位より叙せらる。

此年の正月元日、日蝕あり。西土の説、日蝕は臣として君の

明をかりて象あり。といふ言の有をりて、時平公讒言をかすく。

天子小葵聞せしむる、右大臣陰謀あり。陛下を廢し、御弟

乃齊世親王を御位に即參らせ、其身一人して天下に權威を以て

はんと謀王候し、兼て内外よりいねとあへ漸く小讒せり。此

度の殊小君の御大事、俄に出来たり。言をユめりて申され。時平公幸々の。佞言成りて、常にあま近付參らせ、又これ御

妹、皇后小ゆりませ、内外の讒言行り、故に天子遂に迷ひ

勢多ひて、其事の實否をも糾さず。偏に讒言を信り、正

月二十五日に右大臣此官を止えられ、大宰權帥とす。筑紫に國

を治むる司小左遷し、由の宣旨を下さる。悲なれ、菅公の

才徳古今は秀とせり。四海を撫育し、天子を補佐し、世に類なき

忠臣小おとし坐せり。讒佞乃禍を免せさせり。犯する過ふ

くして、かゝる無實乃罪めて沈ませり。當今も明哲乃

御徳おとし坐せり。後め延喜の聖代と仰ぎ奉る御代あるに、此時

御幸わづらふ十七ふし、悔を故す。姦臣此讒言を信りて、御心迷ひ

のひたることを浅すしきも。菅公はさふ右大臣に任ぜしむる前此
御夢小御腹は松三本生て忽よ三蓋あり。狂風は為小吹折らると
見のひきれた。我三公の位小昇上。はひゆの讒者の為手貶せしむる。
と思召し定ぬる事あれども。然も今更のやめて。御歎は糸堪
ぬつて。上皇は一首の哥をよみとぞ参らせらるる。

流ま行く我が身みづがとありぬとも。君もさうさうゆ成てさ
えと。上皇の哥を御覽して御涙よむせひつ。帝はゆり止めん
と思召して。同月晦日小上西門より。清涼殿小近付せのひ菅根卿
に。参らせらるる由を申す。有るる小菅根もか縁て時平公小ふ
し。又むり上皇の庚辛の御遊あり。ふ時小罪有りて。頬を打ち
参らせしむる恨深し。斯と奏聞せざりしを。天皇出御はす。は。

終は御對面あり。其擧ふ殿上人もあきて。上皇も久し
く。ませのども。帝の御返答も無し。御憤をふ。御涙小
て日も西は傾むくころ。空しく還らせのひたり。宣言重くして。二
月朔日小菅公はひよ都をいで。筑紫小赴らせのひ。追立は官人
ひしと来りて。關所あり。奉り。御子あま。御座せしが。五歳
さうせのひ。御幼男と。門生家子たち少く御供。奉り。天子の御怒
り甚し。これを。長男從五位下右少辨高規。次ハ從五位下式部大丞
景行藏入正六位上兼茂。正六位下文章得業生淳茂。あど。諸
國小流。北方。外姫君たちを。都に残らせのひ。菅公は年
久し。住駒のひ。紅梅殿を立出させのひ。常小夢し。不
梅を御覽し。御名残を惜ませのひ。御哥よ。



東風ふぶ白おとせよ梅の花あるとぞ春あけし
そとぞ遊をさるる草木心をいとども此御哥小感
後予この梅枝さけ折きて雲井遥は飛行て安樂寺へ参り地予
立てて栄えたるこれ所謂飛梅なり櫻も御所在なるが御哥
かりなれば梅櫻あふと籬の内小生たるは梅を御言よかると我のそ
に思召さるらんと思へるや一夜が中ふ枯めりされば源順朝
臣の哥よ。

梅を飛び櫻をかきぬ菅原や深くぞたのむ神のちうひを
と詠まじり世舉て菅公を惜み奉り密よおほかけ成
誹り恨み奉まじり上を恐まじり参りたる人も少りまじり北方
より添られり御使乃道より歸りたるは御文あつりまじりひて

其奥小遊はりける御哥よ

君がまじり宿れ木梢をのりも隠るはをふらと見るうれ
とぞ遊をさるる此時菅公此門下小學問で人くをもと都
を逐放するべし議定らるるに三善清行朝臣書を時平公
贈らるる諫らしむるを其事止より河内國土師の里小菅公の御
伯母覺壽と申せしがあつりたるは立よとせむひ御別を惜み
めつるは雞の鳴りまじり御哥あり

鳴けバこそ別まをいそげ鳥乃音に聞えぬ里のあつる月もが
そまじり此里小雞成畜りてと申傳へまじり筑紫太宰府の里も
今に至るはで雞を畜るも此故ありとぞ土師に里を今の道明
寺村といふ此も後天神乃御社を建たり此里中て来りたるは



途^{ちう}に山^{かみ}上^の。時^{とき}平^{へい}公^{こう}の謀^{まう}ひめや有^ある。数^{かず}十^{じゅう}人^{にん}ありて。御^{おん}車^{くるま}を射^いふこと
 雨^{あめ}乃^なご^ご。御^{おん}門^{かど}生^ま何^{なに}某^みあ^あめ^め射^い殺^{ころ}さ^さふ。河^か内^{うち}小^こま^ま。御^{おん}滞^だ留^{りゅう}
 のと^とた^たも。種^{たね}く^くの計^{けい}を設^せきて。害^{がい}奉^{ほう}らん^んと^と危^{あや}ら^らし^しむ。伴^{ばん}何^{なに}某^み
 とり^と御^{おん}家^け臣^{しん}御^{おん}身^み小^こ代^{しろ}ま^ま殺^{ころ}さ^さふ。辛^{くる}じ^じと若^わ江^えとり^と入^い所^{ところ}ま^まく
 至^{いた}ま^まり^り。此^これ^れも若^わ江^えの靈^{れい}光^{こう}殿^{でん}と^と御^{おん}社^{やしろ}あり。播^{はり}磨^ま國^{くに}明^あ石^しの驛^{えき}小^こ
 こま^まり^りのひ^ひら^らふ。驛^{えき}乃^な長^{なが}が。管^{くだ}公^{こう}の^のか^かけ^けり^りの^のる^る御^{おん}有^あり^り状^{じやう}を^を見^み奉^{ほう}ま^ます。
 驚^{おど}き^き思^{おも}へ^へる^る氣^き色^{しき}を^を御^{おん}覽^{らん}と^とす。

驛長莫驚時變改

一榮一落是春秋

と御^{おん}口^{くち}と^とさ^さび^び有^あり^り。此^これ^れ所^{ところ}め^めも御^{おん}社^{やしろ}あり

天満宮御傳畧記卷上畢

